

## 『常陸国風土記』と民話

今瀬 文也

### 1 概説

「常陸の国司の公文書で、古老が代々語った地名・産物・地味・地名起源、相模の国、足柄山の坂から東はすべて我姫（あづま）の国。その当時、常陸と言わず、新治・筑波・茨城・那賀・久慈・多珂の国といった」

(1) 成立時期不明。元明天皇の和銅6年（713）5月、官命。完成するまで数年。

『豊後国風土記』〔大分県〕、『肥前国風土記』〔佐賀県・長崎県〕、『出雲国風土記』〔島根県〕、『播磨国風土記』〔兵庫県〕の五風土記が現存。完本は『出雲国風土記』で、天平5年（733）完成。

(2) 編集者 石川朝臣難波麿、藤原宇合、高橋虫麿など。文章は四六駢儷体で対句、調子のよい名文。表記については「俗曰、与久多麻礼留美津可奈」など、万葉仮名の記載もみられる。

(3) 成立年代 養老3年（719）から7年ぐらいの間に編纂。藤原宇合は養老3年7月に常陸国守、養老6年（722）、高橋虫麿は主張。

(4) 常陸は常世（とこよ）の国 太平洋・下総国・下毛国・岩城国に接した広大な国。土地が肥沃、海の幸、山の幸があり、人々の生活が豊か。農耕と養蚕を奨励。「古（いにしへ）の人常世の国といふは、けだし疑ふらくは此の地（くに）ならむか」という。常世の国、常住不変、常陸国こそ理想の国と。

風土記は原本はなく、西野宣明の訂正常陸国風土記（板版）天保10年（1839）による。

### 2 常陸国風土記と民話

#### 晡時臥山の神婚説話

『常陸国風土記』は地名説話が多いが、その中で晡時臥山（くれふしのやま）の説話は趣が違う。「努賀一族の始祖神話という形で語られている点に注意したい」（『常陸国風土記』全注釈・秋本吉徳）といい、「その子孫、社を立てて祭を致し、相続（あひつ）ぎて絶えず」ということから、蛇神の子孫がこの地に住んで、神祭りを

したとみられると続けている。

笠間市の晡時臥の山に、兄を努賀毗古（ぬかびこ）、妹を努賀毗咩（ぬかびめ）という兄妹が住んでいた。この努賀毗咩の所に男がやって来て求婚し、一夜の契りで努賀毗咩は妊娠し、小さな蛇を生んだ。妹と兄は神の子であろうと、「浄き杯（つき）に盛りて、壇（うてな）を設（ま）けて安置（お）けり」

ところが、一夜のうちに成長して杯（素焼き）に入らなくなった。次に瓮（ひらか・平たい土器）に入れたが、また成長、何度も交換したが、最後にととう入れる器がなくなった。そこで、母の努賀毗咩は「お前は神の子である。父の元で生活を…」という。子供の蛇は童を一人つけてくれるように願ったが、母は断った。そこで子供は雷になって昇天しようとしたが、母が瓮を投げつけたので昇天出来ず、この峰に留まった。「申し児が小さな蛇の形を以って生れ出たといふ昔話があるが、是など蛇であるだけに人間よりも更に成長が目ざましかった。鉢に入れて置くと鉢に一杯になり、盥に入れて置くと盥に一杯になり、次には馬槽に入れて育てたといふ話もある」（定本柳田國男集8巻48頁）と記し、努賀毗咩が神の児を生んだことを、「是も恐らくあの時代の信じられたる昔の一つであつたらう」と記している。『水戸の民話』（藤田稔著）は民話として伝えている。

「この山のふもとに、ヌカビコ・ヌカビメという兄と妹が住んでいました。ある夜、ヌカビメのところにひとりの男が訪ねて来ました。ふたりは、すっかり気持ちが合って、一晚中いろいろのことを話し合い、朝になると男はどこかへ帰って行きました。どこから来たのか、名前は何というのかも分かりません。

その後も、男は毎晩のように通ってきました。ふたりは心から愛し合うようになり夫婦となる約束をしました。やがて、ヌカビメは妊娠しました。ところが、月満ちて生まれたのは何と1

匹の小さな蛇だったので。蛇は人間の言葉が分かるのですが、昼間は一切お話をしません。しかし、夜になると母と子とは、仲良くお話をしました。

ヌカビメは驚き、もしかしたら神の子ではないかと思い、小蛇を清らかな杯に入れ、祭壇をこしらえてその上に置きました。すると、小蛇は一晩のうちに大きくなり、杯いっぱいになってしまいました。

そこで、瓮（ひらか・皿のような器）に入れ替えたところ、蛇はまた大きくなり、その瓮いっぱいになってしまいました。こうして、次から次へと瓮を取替えるたびに、蛇はたちまち大きくなってしまいうので、入れてやる器がなくなってしまうました。

そこで、ヌカビメは蛇に向かって言いました。「お前は神様の子だ。わたしたちではこれ以上養うことが出来ないから、そなたの父のおられるところに帰りなさい」

蛇はすぐ承知しました。「お母さんの言う通りにいたします。その代わり、だれか一人、童をお供につけてください」

ヌカビメは困ってしまいました。

「この家には、母と伯父ヌカビコしかいない。お供をする人などいないではないか」

すると、蛇はたいへん怒り、いよいよ別れるという時になって、雷のようなはげしきでヌカビコを殺して天に昇ろうとしました。ヌカビメはびっくりし、蛇に向かって瓮を投げつけました。その瓮が蛇の体に触れたとたん、蛇は天に昇ることが出来なくなり、永くこの山にとどまるようになりました。

その瓮甕（みか）は、今もなお、片岡の村に残っていて、子孫たちがお社を建ててお祭りをしてきたということです」

神が蛇やその他の動物の姿になり、女性の夫となる話は全国的で、三輪山説話に近いものである。ここで三輪山信仰について少し考えてみたい。

『古事記』では活玉依毘買（いくたまよりびめ）の所に毎夜男が通って、姫は妊娠し、親が不思議に思い姫に理由を聞き、男の裾に糸をつけた針を刺させた。翌朝糸をたどって行くと三輪神社に続いていた。姫の所に通ったのは三輪の大物主神であることが分かった。『日本書紀』「崇神天皇十年条」では倭迹迹日百襲姫命（やまととびももそひめのみこと）に通ったとあり、その正体を見せよというところの汝の櫛笥（くしげ）の中にいるが、驚くなという。その正体は小蛇（こをろち）だったのである。

『肥前国風土記』の褶振山（ひれふり）の説話では大友狭手彦（おおとものさてひこ）が任那（みまな）に行く時、妻の弟日姫子（おとひひめこ）がこの山に登って褶を振り、弟日姫子が夫と別れて五日の後、毎夜通って来る男があつて共寝し、夜明けになると急いで帰った。容止形貌が狭手彦に似ているので、怪しんで續麻（うみお・紡いだ麻糸）をその人の衣の裾に結んでおいた。その後をたどって行くと、この峰の付近の沼の所に大蛇が寝ていた。弟日姫子の侍女が親戚の者を連れて行くと、蛇も姫もいなかった。そして、沼の底にはただ人の死骸だけがあつた。これが弟日姫子だったという。

この二つと晡時臥山は異類婚姻説話で、三輪山信仰に基づくものとする説がある。『日本文学史の指導と実際』（明治書院）は「以上三つの異類婚姻説話の源流がトテム信仰にもとづくものか族外婚にもとづくものか、諸説があるが、此の研究は多分に文化人類学、民族学の力を借用せねばならぬ問題で、一国内の限られた文献のみでは到底究明し得ない」としている。

鶴殿正元著『古風土記研究』（124頁）三輪山式説話の原型について「(1) 一女性の許に夜間一異性が通いつめること。(2) 男性の姓名も棲所も明かさないこと。(3) 一女性は男性の種を宿すこと。(4) 第三者之を見咎めて理由を糺すので女性がこれを打ち明けること。(5) その結

果として、第三者が男性の棲所及び本体を知らんとして、針に糸を貫いて衣に刺すことを女性に知らせる。(6) 女性は男性の棲所と本体を知る。(7) その結果は男女の分離となること。(8) 「女性は子を生むこと」をあげて、晡時臥山説話は(4)まで一致するが、他が異なるので、三輪山説話の圏外において考える性質のものと言っている。私は一応、三輪山説話として捉えている

『内原町史・通史編』では「晡時臥山の説話」「晡時臥山の意味」「オオナムチ・スクナヒコナの信仰」として13頁にわたって志田諄一氏が詳細に記している。この章の最後で「とにかく『常陸国風土記』は江戸時代に彰考館の史臣に発見され、一部の興味ある人たちが手にすることができたのは、幕末から明治時代になってからのことである」というから庶民が風土記に接することはなかったとしている。

「この説話の本来の姿は、晡時臥山の神を里の女が祭壇に杯をすえて祭り、その神霊が瓮をすゑて祭り、その神霊が瓮にやどった、というものであろう」(202頁)とし『万葉集』巻3をあげ、家に祭壇を立てて斎瓮をすゑ、神を祭祀することが各地の女性によって行われていた。そのことから、一晚のうちに蛇が一杯になったことを、神霊が宿ったとこと記している。

地元では晡時臥山を朝坊山と呼んでいる。201メートルの山だが、神秘的な山となっている。水戸市大足ではダイダラボウ伝説と結びついている。西南には高い山があって、半日は日陰となり、日の暮れるのが早く、仕事にならなかった。それで、ダイダラボウに山を動かしてもらったというのである。この山をクレフシ山というのは、日暮れを防いだという意味だという。

この朝房山は現在の笠間市、水戸市にまたがっている山で4月1日や冬至に全村登山するしきたりもあった。頂上からは大洗まで見えたし四方を見渡せ国見ができた。

ところで、この『肥前国風土記』に似た民話が土浦市にある。「若侍は池の主」で常名の池のほとりに、お婆さんと孫娘が住んでいた。ここに若侍が訪ねて来て、二度三度とひと時を過ごした。「今度お侍さんが見えたら、帰られる前に、お侍さんのお召物のどこかに、そうっと、糸の端を結んでおおき。そうして、あとで、その糸をたぐって行けば、あのお方のお住まいが分かるうというものさ」

娘は、次の日、お侍さんがどんなに遠くへ帰っても後をたどって行けるようにと、長い長い糸を用意した。そして、娘はお婆さんに教えられた通り、日も暮れて月の出る頃になると、若侍の後ろにまわった。娘は若侍に気づかれないように、お召物にそっと糸を結んでおいた。翌朝、娘は糸の後をたどっていったが、三日経っても戻って来なかった。

お婆さんは娘を探しに出掛けた。娘から池の縁であの若侍に会うと聞いていたお婆さんは、池の方に行った。そして、池の奥の茂みの中で娘が息絶えていた。さらに驚いたことには、白い大きな蛇が動かなくなっていた。

「若い侍に見染められ、恋をしたというのに、何とまあ、それが蛇だったとはなあ…」

この伝説は『土浦の民話下』(筑波書林)の記載で土浦市常名に伝わったとされている。なんとなく、日本書紀や肥前国風土記の焼き直しの感がする。他にも類話はある。



**おわりに** 「常陸国風土記」と民話について、晡時臥山をあげた。地元では研究会を結成して、フォーラムなどを開催している。そのほか、「童女の松原」「海幸・山幸」などの日本武尊の伝説が民話になっている。

